

最後の挨拶

会員の皆様のお耳を汚してきた私の会長の時間も本日が最後になります。当年度、計画していた事業も理事役員の皆様をはじめ会員の皆様のお蔭を以て滞りなく遂行することができましたことに心より御礼申しあげます。マッキナリーRI 会長のテーマを受け、「つながりを深める」をテーマにして、会長の時間を展開して参りました。

ロータリーには次の様な有名な例え話があります。即ち、スイスの片田舎でお婆さんが小川で箆に羊の毛を入れて洗っていました。そこに通りがかりの神父が「お婆さんは毎週教会で私の説教を聴いているからさぞ物知りでしょうね」と声をかけました。これにお婆さんが応えて曰く、「聞いても直ぐ忘れてしまいます。でも其れで良いのです。神父さん、箆の中を見てください。水は箆を出入りますが、箆の中の羊の毛はこんなに綺麗になっています。私は神父さんの聴いては忘れていますが、私の心は、少しは綺麗になっていくと思います」

私の拙い会長の時間もこの様にささやかであっても会員の皆様に良いバタフライ・エフェクトとなれば幸いと考えます。そして、会員の皆様に一年間、ロータリーに関する話をさせて頂こうと努めて参りましたが、気が付けば、一番勉強させて頂いたのは自分でした。まさにロータリーの He profits most who serves best です。

英国の歴史家 E.H.カーは名著「歴史とは何か」の中で、「歴史を学ぶとは現代の視点で過去と対話することである」と述べています。私は、一年間、ロータリーを語って来たつもりですが、それはロータリーという膨大な世界の片鱗を述べて来たに過ぎません。しかし、ロータリーの過去と対話することによって、新しいものが見えて来る気がします。

1905年、シカゴで誕生した「ロータリーの物語」はまだまだ続きます。ポール・ハリスは、ロータリーは「常に塗り替えられるべき」と最初から変化と多様性を許容しています。ロータリーは「時間と歴史」という縦軸と「世界や地域」という横軸で展開され、中核的価値観を保ちつつ、時代の流れと共に塗り替えられながら成長を遂げて来ました。

ロータリーの担い手も時代と共に変わって行きますが、変化の方向性を決めるのは世界に現在籍する我々ロータリアンです。ロータリーを取り巻く世界や、AI や IT という産業を始めすべての環境も大きく変化する中であって、E.H.カーの言うように、過去との対話により歴史を解釈する我々は、それだけにロータリーの行方に責任があると思います。これを肝に念じながら、ロータリーの新たな歩みを始めたいと存じます。

本日を以て、龍野クラブに於ける私のささやかな1ページは終わります。最後に皆様に感謝申し上げ、来月から始まる片岡年度の新たな始まりに期待したいと思います。

一年間のご支援・ご協力誠に有難うございました。心よりの御礼申し上げます。